

[掲載紙] 読売新聞「レンゲツツジ」

[掲載日] 2014年7月20日

[テーマ] 群馬県と日銀総裁

今月から「レンゲツツジ」の執筆陣に加えていただくことになった。当地に赴任してきておおよそ2か月。赴任直後から群馬県と日銀の関わりについて調べてきた。もちろん切り口は幾つもあるのだが、今回は群馬県出身の2人の日銀総裁についてご紹介したい。

深井英五総裁（第13代＝昭和10～12年）は、旧高崎藩士の五男として高崎市柳川町に生まれた。新島襄が安中に帰省した際に奨学金の受給者に選ばれ、同志社英学校普通科（現同志社大学）に入学。明治時代の大ジャーナリスト徳富蘇峰が主宰する国民新聞社でジャーナリストとして活躍した後に日銀に入行という異色の経歴を持った総裁である。

2・26事件（昭和11年）に際しては金融界の動揺を巧みに抑えた一方、軍事費増大を背景とした政府による赤字国債の発行増に苦しんだ。高崎市出身という縁もあってか、日銀の理事・副総裁時代に、第1次世界大戦後の世界恐慌のあおりで窮地に陥った上州銀行の救済（大正9年）や上州銀行と旧群馬銀行の合併（昭和7年）にも深く関わったとの記録が残っている。

澄田智総裁（第25代＝昭和59年～平成元年）は、父親が軍隊勤務で各地に転任したため、母親の郷里である吾妻郡高山村で生まれた。大蔵事務次官や日本輸出入銀行総裁を務めた後、日銀総裁に任命された。日銀総裁時代は、日米貿易摩擦、プラザ合意、バブル景気など前例を見ない難題が次々と押し寄せてきた時期でもあった。

実は、私が日銀に入行した時の総裁が澄田総裁。信念の人でありながら入行式での温厚な表情が印象に残っている。澄田総裁が当地で過ごした期間は短かったようであるが、日銀総裁として当地の金融経済を特別な思いで見つめていたに違いない。

日銀の設立は明治15年（1882年）。初代の吉原重俊総裁から数えて現在の黒田総裁は第31代となる。それぞれの総裁の下で日銀が直面してきた金融経済に関わる問題は異なるが、日銀役職員のスピリッツとして受け継がれてきている言葉がある。

「日本経済の良心」<sup>i</sup>と「奴雁」<sup>ii</sup>である。このうち前者が、新島襄の教え「良心を手腕にした人物たれ」の影響を受けたものであることを、当地に赴任してから知った。「平和の使徒新島襄」の教えは私たち日銀役職員の精神にも深く根付いていることになる。これらの言葉を胸に刻みながら当地での職務を全うしていきたい。

※ 文中の澄田智総裁および「日本経済の良心」や「奴雁」に関する内容については「戦後歴代日銀総裁とその時代」（島村高嘉著）を参考にさせて頂いた。

〔 日本銀行前橋支店長  
富田 淳 〕

<sup>i</sup>第17・19代の新木栄吉総裁や第28代の速水優総裁が日銀役職員の精神的支柱として唱えた言葉。

<sup>ii</sup>第24代の前川春雄総裁が好んで引用した福沢諭吉の言葉。「通貨の番人」としての日銀の役割を野に在る群雁の中の見張り役の一羽になぞらえたもの。